

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 13 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520638

研究課題名（和文） リメディアル教育を必要とする学習者の自律性養成のための学習支援の統合的研究

研究課題名（英文） A Comprehensive Study on the Scaffolding for Remedial Learners to Improve Autonomy in English Language in Japan

研究代表者

酒井 志延（SAKAI SHIEN）

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：30289780

研究成果の概要（和文）：

13 大学の 3587 名を語彙サイズテストの結果で 3 分割して、各層の英語学習に対する意識を調査した。その結果、各層を分けているのは認知使用能力であり、成績が低いと認知能力使用が少なくなることを示した。そして内的価値観が多ければ多いほど英語力が高いと証明した。本研究の結果から言えることは、内的価値観が認知方略使用の原因になっているので、あくまでも内的価値観を高めることが優先させることと結論付けた。

研究成果の概要（英文）：

3587 college students from 13 universities were divided into three levels according to the score of an English vocabulary test and investigated about their perception of English language learning. Result one was that one of the major factors which differentiate the upper from the middle and lower percentile groups was the use of cognitive strategies. Result two was that after investigating the cause and the effect between their use of cognitive strategy and intrinsic value, the latter was the cause of the former. Therefore, this study suggests teachers should try to develop their students' intrinsic value for English language learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学，外国語教育，英語教育一般

キーワード：自律養成

1. 研究開始当初の背景

日本の英語教育は、英語を使えるようにし

ているだろうかという疑問は常々抱いていた。パズルを解読するような受験技術は、私

も経験してきたが、それがかなりできるようになっても英語を使う観点ではあまり意味をなさないことが多いが、何とかなることもある。しかし、その「なんとかなる」レベルに達するのは、同学齢のほんの一握りに過ぎない。多くの学習者は、ほんの一握りになれないどころか初歩の段階で挫折しまっている。

2. 研究の目的

日本の英語教育が、ほんの一握りにしか英語が使える道を残していないで、多くを初歩の段階で挫折させているのであれば、そのほんの一握りになる道を広げる方法はないのか、挫折している学習者に救いをもたらす方法はないのか。それが大学教員になってリメディアル教育研究を手掛けるようになってから考えていることだった。

3. 研究の方法

本研究の英語学習の意識に関する尺度は、先行研究から拾い出したもので、「認知ストラテジー使用」、「自己効力感」、「内的価値観」、「自己調整学習」、「試験不安」、「授業への要望」、「言語学習ビリーフ」の7つで、その尺度を構成する調査紙項目は62である。その項目で調査紙を作成した。英語の習熟度の点からも被験者を類別する必要があるので、望月テストで英語習熟度を測り、被験者を試験成績により、上・中・下位層にうまく分類することができた。被験者全体はn=3587で、成績上位層はn=816、中位層は、n=1942、下位層はn=829となった。

4. 研究成果

(1) 「大学生の英語学習意識構造について」

語彙サイズテストで学習者を3層分割し、天井効果とフロア効果を調べた。すると、上位では「英語を聞いたり、英語の番組を見ることは英語の学習で重要であると思う」が天井効果を示し、「英語を話したり、理解するためには、学校の英語の学習だけで十分である」がフロア効果を示した。下位では「試験についてはとても心配している」が天井効果を示した。非常に当たり前の結果が出て実はほっとした。この研究は当たり前のことをきちんとデータで示すことが可能であると分かったからである。

まず、階層間に英語学習意識の差があることが実証されたので、とりあえず、得意な因子分析をすることにした。被験者全体を対象にした因子分析の結果、5つの因子：「認知ストラテジー使用」、「自己効力感」、「授業に対する要望」、「内的価値観」、「試験不安」が抽出された。先行研究から設定した尺度は7つだったので、2つの尺度「自己調整学習」、「言語学習ビリーフ」は、内的信頼性が低く

一つの因子としてまとめることができず、その尺度を構成していた項目は他の因子に吸収されてしまった。この結果も面白かった。でも、日本の英語学習者に、まったく言語学習ビリーフが無いのかということでも無いと思うので、追加の分析をやってみると、以下のことが判明した。日本人学習者の英語学習ビリーフとしては、「日本語を介し英語を学ぶ意識」と「英語をコミュニケーションの手段として学ぶ意識」が被験者の中に同居している。この同居が日本の英語教育の実態を反映していると判った。それで今度は、階層別にこの同居に関して見ると、上位はこの同居に対してやや肯定的で、中位と下位はより肯定的である。そして上位にはその同居から抜け出そうとする意識が醸成されつつあるのかもしれないということがわかった。

それで、抽出された5因子を学力別に分散分析と多重比較で調べることにした。その分析で判ったことをまとめてみる。学力が高いほど、学習に対する意識が教室だけでなく外に向かっている。そして、学習ストラテジーの使用の差が上位、中位、下位を分離している。しかし、認知的活動、自己効力感、学習自律性に対する意識に関しては、上位層は、中位層および下位層とははっきり違うが、中位層と下位層とは明確には区別できないことがわかった。本調査の結果、上位層は学習に対する主体性を持っていると言えるので、自律した学習者に近づいている。しかし、中位層の学習の主体性に対する意識は下位層の持つ意識と変わらない。英語学習に、充實的価値観や実用的価値観を感じる内的価値観においても上位層は、他層よりも高く感じている。中位層は下位層より、ほとんどの項目において数値的に高いが、実用的価値観はほとんど差がない。試験に対しての不安ほどの層にも存在する。しかし、中位層と下位層は受験している間に精神的な不安定感をより強く感じている。上位層はその不安を感じる度合いは低い。

(2) 「大学生の英語学習の意識格差についての研究」

前の調査を受けて、各層の特徴をもう少し詳しく描くために、各層別に因子分析をした。上位層では8個の因子を抽出した：「認知方略使用」、「自己効力感」、「授業での活動（授業への要望）」、「評価」、「試験不安」、「実用的価値観」、「充實的価値観」、「繰り返し方略使用」である。中位層では、全体に対する因子分析と同じ、5個の因子を抽出した：「認知方略使用」、「自己効力感」、「授業への要望」、「内的価値観」、「試験不安」である。中位層の数が多いいせいか全体の分析にいちばん近いのは、中位層の結果であった。下位層でも、5個の因子を抽出した：「自己効力感」、「認知方略使用」、「授業への要望」、「内的価値観」、

「試験不安」である。

いずれの層の第1および第2因子は、「認知方略使用」と「自己効力感」の2つの因子であった。しかし、面白いことに下位層の順序が異なった。「認知方略使用」と「自己効力感」の順序であるが、上位層と中位層では、「認知方略使用」が第1因子で、「自己効力感」が第2因子であった。しかし、下位層では、その順序が逆転し、「自己効力感」が第1因子で、「認知方略使用」が第2因子であった。このことから、上位層と中位層は英語のタスクにあたる時に、認知方略使用に意識を持つのに対して、下位層は、「なんとかなる」という自己効力感が先に来ることがわかった。習熟度が低いクラスでは、中高の復習を中心とした授業を受けて、先生も難しいことは要求しない。そういう授業にいれば、何とかなると思う気持ちが先に来るとは理解できる。まだ、上中下の3層には違いがありそうなので、一つの因子からサブ因子の抽出ができるかどうかを試すように何度も因子分析をした。そうすると、下位に行くにしたがって、認知方略使用因子の結束性が緩くなることがわかった。つまり、認知使用能力を統括しているメタ認知能力が弱いのだろうと結論付けた。また、授業が中位層、下位層の学習者のメタ認知能力を発達させるものになっていないとも考えられる。現在、多くの学校で、学習者の英語習熟度を測定し、そのレベルに合わせた授業を行っている。それは、学習者の実力にあった授業をしようとする教員の配慮であるが、今回の調査の結果を見ると、中位と下位の学習者にとって、そのことは英語学習の意識を教室内に閉じ込め、しかも授業での課題には何とか対処できるという意識を与えるような変則的な自己効力感を生んでいるのではないだろうか。つまり、英語ができない学生のレベルに合わせてようと簡単な授業を行うことが一般的であるが、それではメタ認知を高めることはない。ではどうすればいいのか。今ある大学生用の教科書を見ていると、習熟度が低い学生のできないところを決めつけていると考えられる。しかし、習熟度が低い学生は個人によってできないところが違うのではないか。だから、第一に、教師がまず学習者の発達の最近接領域(ZPD)を見極める力をつけることが重要であろう。ヴィゴツキーのZPDの考えに立つと、教育とは、学習者のZPD内において、教師を含む他者と学習者が協働し、学習者が新知識や技術を習得する過程と言える。教員は、学習者が、他者と協働しながらどのようにすればよりよく学習者のZPDを押し上げることができるかを考え、実行することを支援するべきなのである。そうすれば、課題に対して、認知方略をどのように使えばいいか、実行した後では、それでよかったかどうかを

省察することなどによりメタ認知を発達させることができる。しかし、与えられた課題を見て、学習者が「なんとかなる」という気持ちを持つようでは、ZPDを押し上げることは難しい。そのためには、e-learningや個別学習の研究が必要になると思う。

(3)「日本の英語学習者の認知方略使用構造について」

前の論文についての発表した会場で質問があった。「先生たちの発表内容はよくわかる。自分が受け持っている学生の特徴を良くとらえている。では、その学生に対してどう指導すればいいのか教えてほしい」と言われ、何も答えられなかった。それで、どうすればいいのか汗をかくことにした。方法は2つである。1つは、教育実践であり、他方は学習者の意識のさらなる解明である。教育実践は着々と進んでいるが、まだ発表のレベルではない。その理由として、学習者の認知方略使用が必ずしも解明されたとは言えないからである。したがって、本稿で学習者の認知方略使用構造についてのさらなる解明を試みることにした。つまり、前の論文「大学生の英語学習の意識格差についての研究」では、各層の認知方略使用と自己効力感の関係について記述した。それで、英語力下位層で、「なんとかなる」という自己効力感が高まるのは、与える課題が適切ではないという点つまり、教材の難易度や個別に対応する授業のために、学習者のZPDを教員が適切に把握することの必要性を述べた。

認知方略使用を高めるためには、学習項目の適切性だけでなく、英語を好きだとか、興味があるとかという価値観も認知方略使用に影響すると考えられるので、この研究では、自己効力感以外の因子に焦点を当てることにした。以前にも述べたように、被験者全体の分析で、語彙サイズ試験の成績と相関して上・中・下位層を分けているのは、「認知方略使用因子」である $r(3587)=0.208^{**}$ が判明した。そこで、前回の分析では自己効力感との比較であまり深く実施していなかった各層の認知方略使用についてさらなる掘り下げや、各層別に認知方略使用の差を明らかにしようとした。

被験者全体に対する因子分析では、第1は「認知方略使用因子」で、第2は「自己効力感因子」、第3は「授業への要望因子」、第4は「内的価値観因子」である。これらの因子間の相関を調べてみると、第1と第2因子の関係は $r(3587)=0.050^{**}$ と相関は無い。それに比較し、第1と第3因子の関係は $r(3587)=0.359^{**}$ と中程度の相関で、第1と第4因子の相関は $r(3587)=0.701^{**}$ と強い。したがって、学習者の認知方略使用は第3因子の「授業への要望因子」と第4因子の「内

的価値観因子」により強く影響を受けていると考えられる。研究の方法としては、1) 学習者の「認知方略使用因子」について、被験者の全体、上・中・下位層の因子分析結果を比較してみる。2) 「認知方略使用因子」に影響を与えている2つの因子「授業への要望因子」と「内的価値観因子」を構成している質問項目の比較分析による。そして研究の結果、上位層の認知方略使用についてであるが、この層の学習者は、認知方略能力をある程度発達させている。興味深いのは、学習して自分が重要と思った事項は、自分の言葉に言い換えるように努めていることである。そして既知情報の使用に長けている。その結果、教科書等の内容を何となく理解するのではなく、自分の言葉に置き換えて理解をしている。このことが、上位層が知識の内在化を得意としていることを示している。そのうえ、失敗の省察がある。次に、上位層の授業への要望に関してであるが、内発的動機が認知方略使用に大きく影響しているし、授業において評価を意識するのでは無く、授業を充実させることに関心が高い。授業で扱う題材や活動、学習目標、学習活動形態に興味がある。そして、内的価値観についてであるが、多くの内的価値観を密接に認知方略使用に関係させ、学習の成果を新しい課題に利用し成績をあげている。また、学習やコミュニケーションを役に立たせるものにする 것과全体的な流れをつかむことは、どの層でも相関を持つが、上位層ではその関係がより強い。そして、授業への要望では、難しい内容を好む項目を内的価値観にしているため、チャレンジ精神があると見える。

中位層の認知方略使用についてであるが、中位層は認知方略能力をある程度発達させている。認知方略能力で英語の課題に対処している。既知情報の使用に長けている。そして、失敗に対する省察がある。しかし、重要なことは自分の言葉に言い換えるようにしていない。したがって、教科書等の内容を何となくしか理解していない。このことが2つの層を分けている。

次に、中位層の授業への要望に関してであるが、内発的動機だけでなく、試験などの外発的動機も若干影響している。そして、内的価値観についてであるが、面白いことに、この価値観は、上位層より、中位層そして下位層となるにしたがい、「内的価値観因子」を構成する要素が少なくなるし、認知方略使用との結び付きも弱くなる。また、学習の成果を新しい課題に利用していないので、その結果、成績をあげることができない。学習やコミュニケーションを役に立たせるものにする 것과全体的な流れをつかむことは、この層でも相関を持つが上位層ほど強くない。そして、授業への要望では、難しい内容を好む

項目が内的価値観にないので、チャレンジ精神に欠けると言える。

下位層の認知方略使用についてであるが、この層は英語課題に対する認知方略能力が未発達であると考えられる。その原因については推定でしか言えないが、英語の課題に真摯に取り組む頻度が少なかったからであろう。そのため、認知方略能力以外でそれに近い自己調整学習能力、内的価値観や言語学習ビリーフなどの意識を他の層より多く用いることにより、英語の課題に対処している。また、中位層と同様に、下位層は教科書等の内容を何となく理解して、重要なことは自分の言葉に言い換えるようにしていない。既知情報の使用に長けていない。そして、失敗の省察も無い。

次に、授業への要望に関してであるが、下位層は、認知方略使用はかなり外発的動機に影響されているといえる。特に評価を意識したものであるといえる。そして、内的価値観についてであるが、下位層は、内的価値観を構成する要素も少なくなり、認知方略使用との結び付きもさらに弱い。そのため、学習の成果を新しい課題に利用し成績をあげることができない。学習やコミュニケーションを役に立たせるものにする 것과全体的な流れをつかむことは、この層でも相関を持つが、上位層ほど強くない。そして、授業への要望では、難しい内容を好む項目が内的価値観にないので、チャレンジ精神に欠けると言える。次に、内的価値観についてであるが、3層の比較では、英語力が低くなると、認知的方略使用因子と内的価値観因子の関係が弱くなるし、上位層が、学習に興味を持つことで、頑張りに対して効果的に対処しているが、勉強が楽しいと感じないと努力しない傾向は日本の学習者全般にある。また、日本の大学生のすべての層の認知方略使用に、英語でコミュニケーションをしたいという希望が影響力を与えていることも判明した。

3層の比較の結果、内的価値観と認知方略志向が密接に関連していることが判明した。英語学習に対する内的価値観が高い学習者が英語の習熟度を高めているので、英語力が下位層の学生を指導する教員は、学習者のZPDの把握だけでなく、内的価値観を高めるような指導をしなければならない。

(4) 「日本の英語学習者の認知方略使用に影響を与える要因について」

前の研究の結果を記述しているときに、以下のリサーチ・クエスチョンが生まれた。RQ 1. 下位層の認知方略の結び付きを弱くしている原因はなにか。RQ 2. 内的価値観因子が認知方略使用因子に相関が高いことはわかるが、どちらがどちらの原因になっているのだろうか。RQ 3. いままでの論文で扱って

ないが、試験不安因子も認知方略使用因子に影響を与えている。その関係はどのようなのだろうか。それで、今回の分析には、因果関係を調べることに適している共分散構造分析を使用することにした。分析の結果であるが、RQ1 に関しては、中位層の認知方略使用因子の結束を特に弱くしている項目は、「学習がうまくいくように教科書の概要をつかむようにしている」であり、その項目との組み合わせの結束が低い。下位層では、中位層と同じように、「学習がうまくいくように教科書の概要をつかむようにしている」の項目と「英語を理解するためには英語を日本語に訳さなければならない」と「英語の授業で与えられる課題を、自分はいまこなせると思う」が、絡んでいる組み合わせであった。次に、RQ2 と RQ3 に関する調査は2つある、まず初めは、認知方略使用の原因になっている他の因子の項目である。上位層の認知方略使用には、英語学習の興味・関心、コミュニケーションに対する関心、そして試験に対する不安が影響していることがわかった。中位層では、コミュニケーションへの興味関心が消え、英語学習の興味・関心と試験不安が認知方略使用に影響を与えていることがわかった。下位層では、英語学習への興味関心が消え、コミュニケーションへの関心と試験不安が認知方略使用に影響を与えていることがわかった。RQ2 と RQ3 に関する次の調査は、前の調査とは逆に、他の因子の項目で認知方略使用の原因になっている項目である。上位層で、他の因子に影響を与えている認知方略使用の項目は4項目で、「試験のために勉強する時、できるだけ学んだことを思い出そうとしている」、「先生が言っている内容がよく理解できない時でも理解しようと努めている」、「宿題をする時、問題に正しく答えられるように授業で先生が言ったことを思い出そうとしている」、「試験の結果が悪かった時でも失敗から学ぶようにしている」が原因になっている。中位層で他の因子に影響を与えている認知方略使用の項目は3項目で、「このクラスで教えられている内容は理解できると思う」、「試験の結果が悪かった時でも失敗から学ぶようにしている」、「試験のために勉強する時、できるだけ学んだことを思い出そうとしている」が原因になっていた。下位層では4項目、「このクラスで学んだことを他の授業でも使えると思う」、「英語を聞いたり、英語の番組を見ることは英語の学習で重要であると思う」、「英語の授業で学んでいる内容は知っておくと役に立つと思う」、そして「あるテーマを学習している時に、全体的な流れをつかむようにしている」であった。上位層と中位層が複数の因子の原因になっているけれど、下位層では授業への要望因子に影響しているだけであった。では、認知方

略使用の原因となる内的価値観を増やすにはどうすればいいのだろうか。この論文の考察で、上位層と中位層では、「興味深い」と「重要である」は共有しているが、2つの層の違いは、上位層が「英語は役に立つ」という意識や「コミュニケーションのために学習する」という意識を持っていると述べた。このことは、上位層は英語を役に立たせている経験や実際のコミュニケーションを経験していて、中位層はその経験が無いことが原因だろうと推察できる。そうすると、やはり、英語がある程度熟達しないと、そのような経験ができないので内的価値観が高くないのではないかという意見が出る。しかし、本研究の結果から言えることは、内的価値観が認知方略使用の原因になっているので、あくまでも内的価値観を高めることが先であるということである。さて、考えてみよう。よく言われることだが、英語の熟達度を高くしないと、英語は使えるようにならないだろうか。実際に、そう考えられていることが多いと思う。現在の日本の英語教育では上位層や中位層に対して、英語の基礎知識をつけた上でのコミュニケーション指導は研究・実践されてきたが、下位層にはまず基礎知識の再教育という考えが主流を占めているので、英語でのコミュニケーション指導はほとんど考えられてこなかった。しかし、本研究は、下位層にはまず基礎知識の再教育という考えではうまくいかない現実を裏付けた。では、どうすればいいのか。下位層に対してもコミュニケーション指導をすべきであろう。しかし、上位層や中位層に対しての英語のコミュニケーション指導法をそのまま下位層に移植しても基礎知識が無い分、うまくいかないだろう。だから、下位層に対する英語のコミュニケーション指導は、文法的に正確を期す窮屈なものではなく、文法ミスや言い間違いを大いに許容し、身ぶり手ぶりを使って「伝わること」に焦点を置いたものになるべきであろう。このように、下位層に対する英語のコミュニケーション指導を研究するのもリメディアル研究の一つの大きな役割であると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

- 1) 「日本の英語学習者の認知方略使用に影響を与える要因について」、『リメディアル教育研究』2012, 査読あり, vol. 7, no.1, pp.142-153, 酒井志延.
- 2) 「英語教育の2つの課題とCEFRの文脈化」, Media, English and Communication, 2011, 査読あり, vol. 1巻, pp.27-40. 酒井志延.

3) 「日本の英語学習者の認知方略使用構造について」, 『リメディアル教育研究』2011, 査読あり, vol. 6, no. 1, pp. 55-70, 酒井志延.

4) 「リメディアルと向き合う」, 『英語教育』, 2011, 査読なし, vol. 59. no. 12, pp. 10-12, 酒井志延.

5) 「大学リメディアル教育」, 『英語教育』2010, vol. 59, no. 8, pp. 30-31, 酒井志延.

6) “Promoting Learner Autonomy: Student Perception of Responsibilities in a Language Classroom in East Asia”, Educational Perspectives (University of Hawaii), 2010, 査読あり, vol. 43, No. 1&2, pp. 12-27, Shien Sakai, Akiko Takagi, and Man-Ping Chu.

7) 「大学生の英語学習の意識格差についての研究」, 『リメディアル教育研究』2010, 査読あり, vol. 5, no. 1, pp. 9-20. 酒井志延, 中西千春, 久村研, 清田洋一, 山内真理, 間中和歌江, 合田美子, 河内山晶子, 森永弘司, 浅野享三, 城一道子.

8) 「大学生の英語学習意識構造について」, 『英語教育』2010, 査読なし, vol. 58, no. 11, pp. 66-68, vol. 58, no. 12, pp. 66-68, 酒井志延.

9) “Relationship between learner autonomy and English language proficiency of Japanese learners”, The Journal of Asia TEFL, 2009, 査読あり, vol. 6, no. 3, pp. 297-325. Shien SAKAI and Akiko TAKAGI.

[学会発表] (計5件)

1) Symposium “How to nurture autonomy in English language learning in an EFL environment”, AILA 2011, Beijing University of Foreign Studies, 2011年8月27日, 酒井, 清田, 高木, 中山, 朱.

2) Symposium “How to Nurture Students’ Metacognition” 日本リメディアル教育学会, 湘南工科大学, 2010年8月30日, 酒井, 久村, 合田, 臼倉, 山本.

3) Symposium “Improving students’ learner autonomy in Japanese educational settings” ASIA TEFL, Hanoi, Vietnam, 2010年8月8日, 酒井, 高木, 清田.

4) Symposium “Improving Students’ Learner Autonomy in Japanese Educational Settings” JUSTEC(日米教師教育コンソーシアム) ハワイ大学 East-West Center, 2009年9月19日, 酒井, 高木, 清田, 中山.

5) シンポジウム「リメディアル教育を必要とする学習者の自律性養成のための学習支援の統合的研究」, 日本リメディアル教育学会, 千歳技術科学大学, 2009年9月2日, 酒井, 清田, 合田, 山内, 間中, 中西.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

酒井志延 (SAKAI SHIEN)
千葉商科大学・商経学部・教授
研究者番号：30289780

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

久村研 (HISAMURA KEN)
田園調布学園大学・未来こども学部・教授
研究者番号：30300007
清田洋一 (KIYOTA YOUICHI)
明星大学・教育学部・准教授
研究者番号：60513843